様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００５５１

研究課題名（和文）認知言語学における「捉え方」概念と言語哲学における「意義」概念の統合に関する研究

研究課題名（英文）Research on integration of 'construal' in cognitive linguistics and 'sense' in philosophy of language

研究代表者
酒井　智宏（Sakai, Tomohiro）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：００３９６８３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：言語表現の多義性が発話主体と対象・事態との認識論的関係の違いから生じうることを明らかにした。スーパーマン = クラーク・ケント」を知らない話者にとっては「スーパーマンはクラーク・ケントより多くの高いビルを飛び越える」二つの個体に関する文となり、知っている話者にとっては単一個体の二側面の関係に関する文となる。「この船をエリザベス号と名づける」が示す事実確認用法と遂行的用法との間の多義性は、話者が命名儀式に対して反省的視点をとるか没入的視点をとるかの違いに対応する。同様の分析をアイロニーにも応用し、言語表現の使用に話者による自身の行為に対する捉え方が刻み込まれていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の言語学では「上り坂 vs. 下り坂」など「同一対象・事態の捉え方の違いが言語形式の違いに反映されうる」と考えられてきた。本研究ではそれに加えて「同一の表現形式に話者の複数の認識論的状態が対応しうる」ことを示した。同一物指示の複数の名前を含む文(「スーパーマンはクラーク・ケントより多くのビルを飛び越える」)、アイロニー(「(梅雨の時期に)毎日本当にいい天気だね」)、遂行的発話(「開会を宣言します」)などさまざまな言語表現に、話者が自分自身の言語行為を複数の視点から捉える能力が反映されている。これに基づき言語形式のみを手がかりとする言語学の限界を明らかにし、言語学と心の哲学との接続を図った。

研究成果の概要（英文）：This research has shown that polysemy can arise from different epistemic relations between the speaker and the object or state of affairs. For those who do not know the identity between Superman and Clark Kent, 'Superman leaps more tall buildings than Clark Kent' represents a relation between two individuals, while for those who know the identity it represents a relation between two aspects of one and the same individual. The constative use of 'I name this ship Queen Elizabeth' corresponds to the speaker's reflective construal of the ritual in which the sentence is uttered, while the performative use of the sentence corresponds to the speaker's projective construal. Similar analyses apply to ironical utterances. In many cases, the speaker's different construals of her own speech act are inscribed in the use (as well as the form) of linguistic expressions.

研究分野：言語学

キーワード：捉え方　意義　単文のパズル　遂行発話　アイロニー　発語内効力　発話者　固有名詞

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の出発点となった問いは次のものである。

問い: 以下のAを受け入れている(知っている)人と受け入れていない(知らない)人で文Bの解釈(真偽判断)に差がないという事実をどのように説明すべきか。

A. スーパーマン = クラーク・ケント

B. スーパーマンはクラーク・ケントより高いビルを飛び越えることができる。

この問いが生じる学術的背景は次のとおりである。Aを受け入れると(そして問題の人物をaとおくと)、文Bは「aはaより高いビルを飛び越えることができる」という矛盾した命題を表すと予測されるが、実際にはBはごく平凡な事実を述べた文にすぎない。単文のパズルと呼ばれるこのパズルの有力な解決案として、意味論的には個体を指す固有名詞「スーパーマン」「クラーク・ケント」が、Bにおいては「全体→部分」のメトニミーにより個体のある局面(それぞれbとc)を指し、Bは「bはcより高いビルを飛び越えることができる」を表すとするものがある。このメトニミーによる解決は認知言語学にとって受け入れやすいものであると考えられる。

この解決案に関しては、Aを知らない人でも問題なくBを真と判断することができるという問題が指摘されている。「個体a→個体の局面b/c」というメトニミーが可能であるためには、まず個体aにアクセスしなければならないが、それができるためにはAを知っている必要があるはずである。ところが、実際にはaを経由する能力のない人でもb/cにアクセスすることができる。本研究代表者は、この事実を説明するために、固有名詞は個体を経由しなくても個体の局面を直接指示することができるとする固有名詞論を構築し、BおよびBに関連するいくつかの現象を説明した。

しかし、この固有名詞論にはなお問題があることがわかった。この固有名詞論によると、固有名詞は本来的に言語使用者の関心に応じていかなる対象も指すことができ、「固有名詞は個体を指す」というのは意味論的事実ではなく社会的慣習にすぎないことになる。これは「固有名詞は典型的には個体の名前である」という普遍的事実と相容れないだけでなく、「世界に存在するのは質(属性)のみであり、個体なるものは虚構にすぎない」という極端な記述主義を許容してしまう。そこで、本節冒頭の問いには「固有名詞は典型的には個体を表す」という想定のもとで答える必要がある。

２．研究の目的

本研究は、A を受け入れる人とそうでない人とでは B の理解のあり方に違いがあるという点に着目する。B は真理条件の部分とその捉え方の部分に分割することができる。

C. B の真理条件: 「スーパーマン」が指す対象 b は「クラーク・ケント」が指す対象 c より高いビルを飛び越えることができる。

D. A を知っている人の C の捉え方: b と c は同一個体 a の異なる局面(aspect)である。

E. A を知らない人の C の捉え方: b と c は異なる個体である。

簡単に言えば、A を知っている人も知らない人も同じ対象 b と c を指示している(そのため B の真理条件的理解に差はない)ものの、前者は b と c を局面として理解し、後者は個体として理解している。このとき「スーパーマン」や「クラーク・ケント」が局面指示と個体指示で多義語化していると考えることはできない。多義とは一般に、同一話者の言語知識において関連する複数の語義が単一の言語形式に結びついている状態を言う。これに対して、D と E は複数の異なる話者の知識状態を記述している。D と E が示すのはむしろ「言語表現の形式が同じでも、(話者の置かれている状況によって)それが表象しているものの捉え方は異なりうる」ということだと考えられる。これまでの認知言語学では「上り坂」と「下り坂」、「猫がネズミを追いかける」と「ネズミが猫に追いかけられる」など、「表現の形式の異なりに応じて、同一対象/事態の捉え方が異なる」ということが広く受け入れられてきた。本研究の着眼点を認知言語学の枠組と整合さ

せるためには、表現形式の相違が実は捉え方の相違にとって必要条件でないことを示さなければならない。

そこで本研究では、認知言語学において広く受け入れられている「対象/事態の捉え方(construal)の違いが言語表現の違いに反映される」というテーゼに加えて「言語表現の形式が同じでも対象/事態の捉え方が異なりうる」というテーゼを確立する。この目的のために次の二つの作業を行う。

(1) 認知言語学の「捉え方」の概念と言語哲学における意義(sense)の概念を統合する。
(2) 意義は(当初のフレーゲ解釈に見られたような)対象の属性記述に還元されるものではなく、主体と対象/事態との認識論的関係に対応するという新フレーゲ主義のテーゼの妥当性を論証する。

単文のパズルに代表されるような存在論にかかわる言語現象は、言語哲学・心の哲学ではさかんに議論されているが、そうした議論が認知言語学的観点から見直されることは少ない。唯一の例外はメンタル・スペース理論であるが、今日研究がさほど進展しているとは言えない。第二に、1950-1980 年代のフランスにおけるバンヴェニスト、コルニュリエ、デュクロ、フォコニエ、レカナティらによる言語行為をめぐる議論は、すぐれた認知言語学的観点を多数含みながら、ほとんどがフランス語で著されていたこともあり、その成果が積み残されている。本研究はこれらの研究を架橋し、認知言語学における主体と対象/事態とのインタラクションに関する理論的研究を深化させようとするものである。

３．研究の方法

フレーゲは意義を「対象の把握の仕方」とみなす。この点で「意義」はかなりの程度まで認知言語学の「捉え方」と類比的であり、類比的でない点についても両者の統合は技術的に可能であると考えられる。従来、フレーゲの「「明けの明星」と「宵の明星」は意味は同じだが意義が異なる」という発言があまりにも有名になり、「表現形式の違い ＝ 意義の違い」という相関が読み取られることが多かった。しかし、フレーゲはもともと、異なる話者によって「アリストテレス」という名前や「私」という指標詞の使用に異なる意義が結びつけられる可能性を認めていた。フレーゲのテクストから意義の正確な定義を読み取るのは難しいが、その後のフレーゲ研究により、意義とは対象と主体との認識論的位置関係にほかならないという考え方が有力になっている。そこで、この知見を応用することで、「表現形式の違いに還元されない意義/捉え方の違い」がありうるという見通しが立つ。

ここで A(「スーパーマン ＝ クラーク・ケント」)を見直すと、A を知っている人はスーパーマン(対象 b)が空を飛ぶのを見て、「クラーク・ケントはときどき(変身して)空を飛ぶ」という信念を形成するのに対して、A を知らない人はそうした信念形成を行うことはないことがわかる。これは A を受け入れる人とそうでない人とで対象 b との認識論的関係が異なる(b から得られる情報が異なる)ことを物語っている。以上の論証を完成させることができれば、「言語表現の形式が同じでも、(話者の置かれている状況によって)それが表象しているものの捉え方は異なりうる」というテーゼが確立されることになる。
このテーゼを遂行発話の分析に応用し、I order you to leave といった発話の二通りの解釈(事実確認 vs.行為遂行)が主体と事態との認識論的関係に還元されることを示す。

４．研究成果

本研究の成果は次の五点にまとめられる。このうち(3)と(5)は研究開始当初には予期していなかった成果である。

(1) 「スーパーマン ＝ クラーク・ケント」を知っている話者と知らない話者とでは「スーパーマンはクラーク・ケントより多くの高いビルを飛び越える」という文の捉え方が異なることを示すことにより、強い記述主義を退けた。「スーパーマン ＝ クラーク・ケント」を知っている話者はスーパーマンとクラーク・ケントを同一個体の異なるアスペクトとして捉えているのに対して、両者の同一性を知らない話者はそれらを異なる個体として捉えている。それゆえ、どちらの認識的状態にあろうとも、「スーパーマンはクラーク・ケントより多くの高いビルを飛び越える」という文の捉え方の中には、個体に関する思考(単称思想)が含まれていることになる。この考え方を応用することで、「スーパーマン ＝ クラーク・ケント」の認識価値をフレーゲ的意義(記述的意義)に訴えることなく説明することが可能になる。文の真理条件だけでなく捉え方まで考慮するならば、「スーパーマン ＝ クラーク・ケント」や「ス

ーパーマンはクラーク・ケントより多くの高いビルを飛び越える」のような非単称命題の理解においても、単称思想が不可欠である。

(2) 文の事実確認的ないし記述的用法と行為遂行的用法の違いが、発話と世界の関係の捉え方の違いに由来するものであることを示した。Austin (1962)は I name this ship the *Queen Elizabeth*という文Sを発話することはすなわち命名という発語内行為を行うことにほかならず、この発話は真でも偽でもないと考えた。他方、Sには事実確認的用法もあり、その用法のもとでは、Sは通常の平叙文の発話と同じく真理値をもつ。行為遂行的用法と事実確認用法は、同一の発語行為に対応する一方、異なる発語内効力をもつ。Sの発話者は(狭義の)行為遂行的用法においては命名行為を、事実確認的用法においては主張行為を遂行する。行為遂行的発話はRecanati (2000)の言う没入的な捉え方に対応し、儀式を構成する象徴的行為の一つとして捉えられる。このとき、発話は当該の儀式によって規定される発語内効力をもつ。他方、主張的発話はRecanati (2000)の言う反省的な捉え方に対応し、儀式を外側から記述することを意図した行為として捉えられる。このとき、発話は発話者の伝達意図に沿って解釈される。この分析は、遂行性に起源に関するDucrot (1972, 1977/1991, 1980)やFauconnier (1979)の考え方と整合的であり、かつ、Strawson (1964)によって指摘された、主張的発話が(行為遂行的発話と異なり)独自の適切性条件をもたないという事実をも説明することができる。

(3) 日本語の人名は、カナ表記が可能であること、漢字を用いる場合には指定された2,399文字(常用漢字2,136文字＋人名用漢字863文字)から選択すること、という二つの条件さえ満たせば、長さにも漢字の読み方にも制限がない。日本ではよく知られたこの事実を言語学的に解釈すると、日本語の固有名詞は、発音上の基準を適用する場合と表記上の基準を適用する場合とで同一性の基準が著しく異なることになる。現時点では名前の長さを競う動きが見られない反面、新奇な表記を競う傾向がはっきりと見られる。これは、欧米基準では「同一の名前」とみなされるものが、「どう表記される名前か」という観点からは「際限なく異なる名前」として捉えられうることを示している。こうした「捉え方」概念の意外な応用可能性をイェーテボリ大学研究叢書収録論文として刊行した。

(4) 同様の考え方をアイロニーに適用した。アイロニーに関する「ふり」説によると、アイロニーPを発話する者は、Pを言うふりをしているにすぎず、Pは発語内効力を伴わない。「エコー」説によると、アイロニーの発話者は、ある人ないしあるタイプの人に暗黙裡に帰属された思考をエコーし、その思考に対する乖離的態度を示す。グライスは、アイロニーが質の第一格率に違反する発話であり、Pを言ったかのように見せかけていると述べるが、これを「発話者はPを言っていない」と解釈するのは誤りである。「Pである。しかし私はPだとは思わない」という発話が矛盾を含まないにもかかわらず奇異に響く現象は「ムーアのパラドックス」と呼ばれる。このパラドックスはたとえPがアイロニーとして発話された場合でも同じように生じる。このことから、アイロニーの発話者がPを真なるものとして提示していること、すなわち自らを、Pを主張する発語内行為を遂行する者として提示していることがわかる。デュクロの用語では、アイロニーの発話者は、発語行為の遂行者である「話し手(speaker)」が、発語内行為の遂行者である「発話者(enunciator)」と同一人物であるという体で発話を行っており、この点でアイロニーとそれ以外に違いはない。アイロニーの特徴は、状況からしてSがPだと思っていないことが明白であり、かつその事実が認識されることを発話者が期待している点にある。アイロニーの発話者は、Pを主張する行為を遂行している体裁をとりつつ、同時に自らがPの発話者でないことが明白であるようにふるまう。Pを主張する発語内行為を遂行するふりをしつつ、Pを発する発語行為を遂行するふりはしないということは可能であり、このことが「ふり」説を「エコー」説と実質的に等価なものにする。

(5) 「主張力を伴う発話」が一枚岩ではなく、提示様式に応じていくつかの類型に分けられることを示し、命題の統一性を保証するものは何らかの発話者の主張行為であるという、命題の統一性に関する言語行為論的解決の精緻化に着手した。一般に、文pがqを意味論的に含意するとき、pに対してある命題態度をもつ者はqに対しても同じ命題態度をもつと考えられてきた。たとえば、一位でゴールすれば優勝となることが知られている競技に関して、「ジョンが一位でゴールした」と主張する者は「ジョンが優勝した」とも主張しており、「ジョンに一位でゴールしてほしい」と望む者は「ジョンに優勝してほしい」とも望んでいる。しかし、この考え方はp の発話者がつねにp とq に同程度にコミットするという誤った図式に基づいており、前提に関して誤った予測を行う。「ジョンはタバコをやめた」は「ジョンは以前タバコを吸っていた」を含意(前提)するが、Dinsmoreの言うように「ジョンにタバコをやめてほしい」と望む者が「ジョンに以前タバコを吸っていてほしい」と望むとは限らない。Ducrotの用語を用いると、ジョンにタバコをやめてほしいという発話/思考を行う者は、「ジョンはタバコを吸わないでほしい」と望む発話者(enunciator)1と、「ジョンは以前タバコを吸っていた」と主張する発話者2の声を重ねており、自らを発話者1に、世間の声を発話者2

に同化させている。このポリフォニー的な考え方を応用することにより、いわゆる主張力を欠く平叙文(否定文not P, 埋め込み文Mary believes that P, 条件節If P, then QのPなど)は、本当に主張力を欠いているわけではなく、主張者の判断Pと距離を置こうとする発話者の態度を表すという考え方を提案した。(ただし、この提案は口頭発表の段階に留まっており、論文の形ではまとめられていない。この提案を精緻化し、国際学術誌に投稿することが今後の課題である。)

以上により、言語行為に話者による自身の行為に対する捉え方が刻み込まれていることが示された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 SAKAI, Tomohiro	４．巻 43
２．論文標題 On the Equivalence of the Pretense Account and Echoic Account of Irony	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Tokyo University Linguistic Papers (TULIP)	６．最初と最後の頁 221-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 SAKAI, Tomohiro, KINOSHITA, Soichiro	４．巻 42
２．論文標題 To Commit, Not to Commit, or to Commit to Not Committing: Review Article of Nayuta MIKI (2019) Psychological and Public Aspects of Speaker Meaning: Toward a Philosophy of Communication, Tokyo: Keisoshobo, 285pp, in Japanese.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Tokyo University Linguistic Papers (TULIP)	６．最初と最後の頁 195-222
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 SAKAI, Tomohiro	４．巻 44
２．論文標題 On Japanese generic names: are they part of the language?	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Namn i skrift. Names in Writing	６．最初と最後の頁 307-324
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Tomohiro SAKAI	４．巻 41
２．論文標題 Between Performatives and Constatives: Construal in Speech Acts	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Tokyo University Linguistic Papers	６．最初と最後の頁 259-277
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Tomohiro Sakai	4．巻 40
2．論文標題 Singular Thought in Non-Singular Propositions: A Cognitive Linguistic Perspective	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Tokyo University Linguistic Papers	6．最初と最後の頁 211-227
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 SAKAI, Tomohiro
2．発表標題 Polysemy Across Languages and Lexical Externalism
3．学会等名 Pragmasophia 3, Noto, Italy (Online)
4．発表年 2021年

1．発表者名 酒井 智宏
2．発表標題 叙述の非言語学
3．学会等名 基礎言語学研究会設立記念シンポジウム「言語(研究)の基礎」（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Tomohiro SAKAI
2．発表標題 Toward an Internalist Construal of Semantic Externalism
3．学会等名 Categorisation claire vs approximative: a la recherche d'indices de differentiation（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Tomohiro Sakai
２．発表標題 On Japanese Generic Names: Are They Part of the Language?
３．学会等名 Namn i skrift/Names in Writing, Gothenburg University（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 酒井 智宏
２．発表標題 認知言語学中上級: メンタル・スペースとその周辺
３．学会等名 日本言語学会2018年度夏期講座（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Tomohiro SAKAI's Website https://www.tomohirosakai.com

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関